

小林秀雄著『本居宣長』：十九章主題(眞淵『冠辭考』)の「關係論」的纏め。

①古い措辭(言葉遣ひ。物：場 C')②冠辭(物：場 C')⇒からの關係：⑥がこの①(②)を、改めて吟味しようとした頃には、この言葉(②)は既に死語と化してゐて、意味不明のままに歌の本意とは關係なく、ただ古來傳世の用例として踏襲されてゐた。「③：死語(②)は生前どんな風に生きてゐたか」(D1の至大化)⇒「④『言靈の佐(たす)くる國』⑤長い言語傳統」(③的對立概念F)⇒E：人麿が歌つた(Eの至大化)やうに、④に生きる喜び(Eの至大化)、自國に固有な、⑤への全幅な信賴(Eの至大化)が、この大歌人の才を保證(Eの至大化)してゐたであらう。⑥がひたすら想ひ描かう(Eの至大化)としたしたのはそれ(④⑤)である」(④⑤への距離獲得：Eの至大化)⇒⑥眞淵(△粹)：①②への適應正常。

①直接感性に訴へて來る言語像(詩歌。物：場 C')②共通の知覺(物：場 C')⇒からの關係：この一見偏頗な傾き[即ち「未熟な意識(素朴な心情)が、具體的に特殊な①(つまり詩歌)に執着する(D1の至小化)」]も、「③：誰にも②が求めたいといふ願ひ(D1の至大化)を、内に秘めてゐる(D1の至大化)と考へざるを得まい」(D1の至大化)⇒「④：メタフォーア(メタファー：隱喩)」(③的概念F)⇒E：この秘められた知性の努力(②が求めたい)が④を創り出し(Eの至大化)、言葉の間隙(言たらず)を埋めよう(Eの至大化)とするだらう。④とは、言はば言語の意味大系の成長發展[間隙(言たらず)を埋めよう]に、初動を與へたものである。⑤が、『萬葉集』を穴のあくほど見詰めて、(言たらずに)『ひたぶるに眞ごころなるを、雅言[みやびごと：(例)あしびきの]もて飾れ』る姿(即ち『冠辭』)に感得した(Eの至大化)ものは、この初動の生態[メタフォーア(隱喩)で間隙(言たらず)を埋めよう]だつた(Eの至大化)と考へていい」(④への距離獲得：Eの至大化)⇒⑤眞淵(△粹)：①への適應正常。

